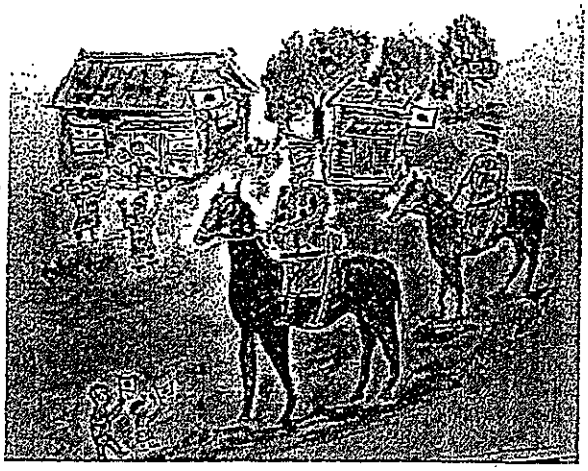
原　爆　体　験　記

平成２６年５月１５日

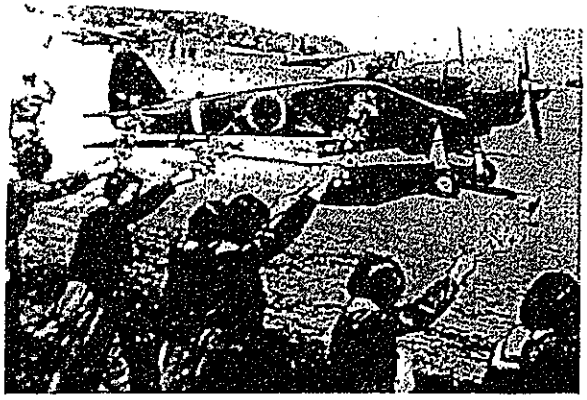


私が小学校に入った昭和１３年頃は、日本軍は世界でも有数の軍事大国と自負していたようです。そして中国の東北部に進出していました。その頃はアジアのいたる所の国を資源を求めて植民地にしていた欧米各国は日本の進出に対し危惧を感じ、経済封鎖を始めましたので鉱物、石油、ゴム等が欠乏してきて工場の生産は勿論・生活物資にも影響してきました。　とうとう（１９４１）昭和１６年１２月８日、ハワイの真珠湾にいたアメリカの太平洋艦隊を攻撃に始まり、太平洋戦争（大東亜戦争）に突入してしまいました。

私達子供は軍国少年として「お国のためなら一身をなげうって尽くす」言う教育を受けていました。そして日本の今やってる戦争は世界平和の為でアジアを欧米各国から解放するんだと、教えられそれを信じ誇りとして、正義感に燃え将来は軍人になることを夢みていました。

戦争は初めは調子よく勝っていて、赤道を超えて南方まで進んでいましたが、昭和１９年頃になると圧倒的物量を持つ米軍に押され、　昭和１９年になると戦場が日本の近くまでやってきて、

国内の都市が空襲される様になり戦場が間近に迫ってきましたが、一途に「最後は日本は勝つんだ」と信じていました。それで特攻隊をかっこよく、又憧れていました。

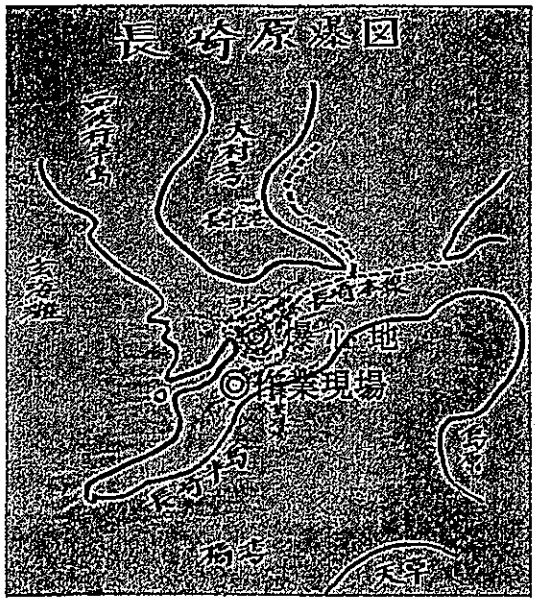


しかしそのときはもうアメリカはサイパン、テニアンへ島に悪魔の兵器原子爆弾を持ち込み着々と日本への原子爆弾攻撃の準備をしていました。

１９４５年（昭和２０年）８月６日の広に原子爆弾リトルボーイ（重量４ｔ核物質はウラン８００ｇ）搭載する爆撃機はＢ２９エラノゲイ。

続く８月９日に長崎に投下された原子爆弾はファットマン（重量４，５ｔ、ウラニュウム１kg）で　搭載爆撃機はボックスカーと言いました。

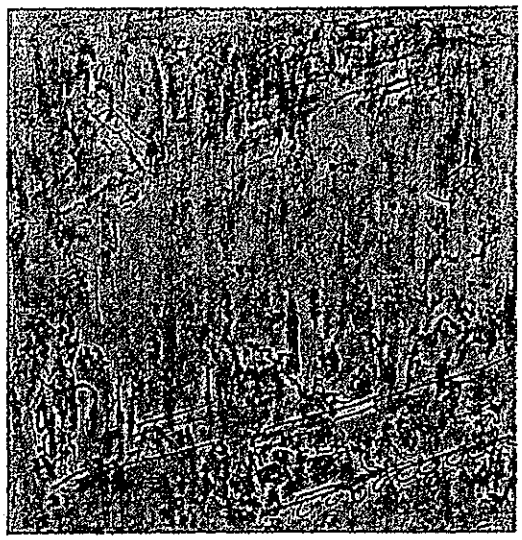
私はその時は長崎工業の１年生でした。



原爆投下された日は朝から空襲警報が鳴りましたがすぐ解除されたので、原爆の爆心地から６，5km離れた東シナ海に続く天草灘のきれいな海が見える、野母半島（長崎半島）の尾根を、米軍の上陸に備て、陣地、

構築作業を長崎の要塞司令部の指揮もとやっていました。その当時は勝利を信じ真剣に穴を掘り、その土をモッコに入れ３０ｍ位離れた谷に運ぶ作業で、一生懸命やることが国の為何かやってると言う満足感がありました。

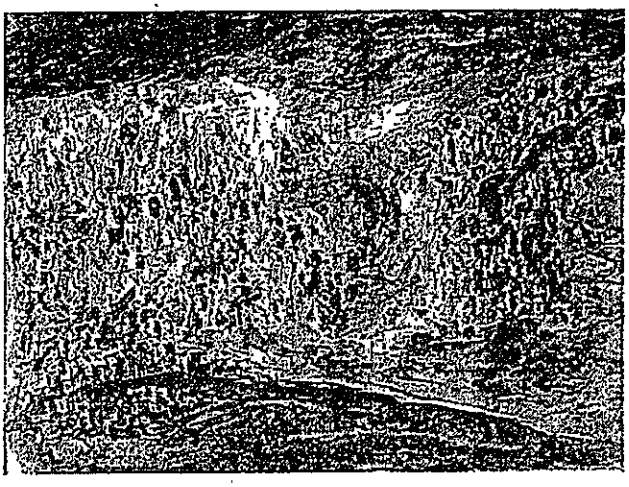
１１時少しすぎた頃、空は綿をちぎった様な雲がところどころ散らばってるような空でした、そんな時、爆音が聞こえてきました、はじめは空襲警報にもなってないし味方の飛行機かなと思っていたところ突然監視の兵隊さんが「退避」と叫んで警笛を鳴らしたので、担いでいた土のはいったモッコをその場に投げ捨てあわてて自分たちが掘ってる壕に逃げ込もうと走ろうとした時急にピカ！と一瞬あたりが真っ白になるすごい閃光が来て、なにが起きたかも分からず、壕にむかって走った、壕の所まで来たとき、まわりの立木をなぎ倒さんばかりの爆風が来て壕の中に叩きおとされました。すぐそばに爆弾が落ちたんじゃないかと思い、壕の中でみんな丸くなってじぃとしてしていたところへ監視の兵隊さんが「壕か



らでるな」と言ったのでそのままいました。その瞬間の爆心地あたりの地上は瞬間２０００度くらいの熱線と衝撃波が地上を走り回り、破壊と消滅が起き爆風により叩きつけられて、地獄の惨状になっていたと思います。

私達は現場で３時過ぎになってようやく監視の兵隊さんが「壕から出てもてもよい」と言われたので壕から出て、長崎市街の上空を見ると空一面真っ黒な雲のような煙に覆われて、こちらにきそうに、すごい煙が広がってがっていました、それからしばらくしてごみが混じって変なススみたいなものが降ってきました。

みんな自分の家を心配しながら帰宅命令を待ち、うろうろしていました、６時頃だったと思いますが。「各自地域ごとに隊を編成して帰ってよい」言う命令で、それぞれ帰途につきました。私の家は長崎市内の爆心地から４，5kmくらいの少し高台になった東小島と



いうところにありました。家に帰って見ると天井が吹き上がっていて瓦がずれていて、上にがって大分直しましたが、雨が降ったら雨漏りして大変でしたが、一応家族は姉が国鉄に勤めていて重傷者の救護班で家に

いませんでしたが無事と言うことでした。夜になって家から少し登った所に墓場がありそこから長崎県庁・長崎駅の方が見通せて、真っ赤な炎を上げてで空一面真っ赤に染めていました。

その日から近くの岩山のガケを隣近所の人と力を合わせで交代でコツコツとノミで掘って奥行き１５ｍくらいの防空壕にゴザを敷いて警報が鳴ったら行ったり来たりの生活でした、３日ほどし時母が「浦上の叔母さん所を見に行こうか」というので母と私と二人でまだあちこち盛んに黒い煙をあげてる市内に向かって出かけました。叔母の家は叔父が出征していて、二つになる「[redacted]ちゃん」という可愛い従妹がいました。

途中まだ黒い煙を吹き上げ盛んに燃えてる中を通りながら。長崎駅付近まで来ると火傷が膿んでだり、皮膚が焼けただれた人や、消毒の赤チンでよごれたユカタを着てうろうろしていました。辺りはすごい臭いがただよっていました。

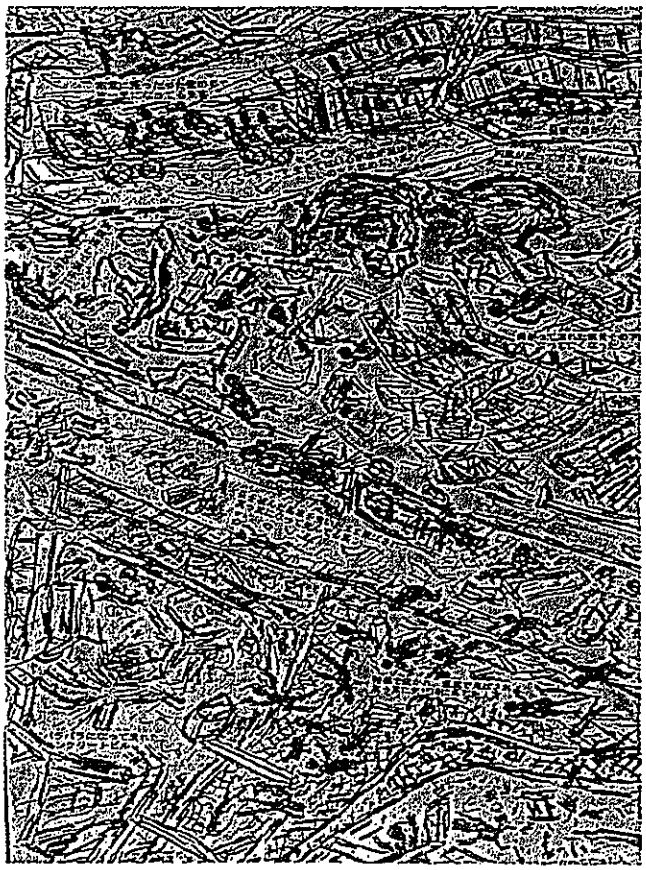
長崎駅を少し過ぎたころまだ生きた馬が背中が焼けただれ蝿がたかってもじいっとしていました、そばには腹の中で腐敗したガスが溜まり破裂しそうにふくれ上がって死んでる馬が何頭もいました、その頃はガソリンは軍事用で、一般の輸送の主役は馬車ででした。駅に荷受け待ちの馬車が待

機していたのです。長崎駅を過ぎて浦上駅近くの三菱製鋼所の鉄骨が飴の様になって下の石炭の山すごい煙をあげて燃えあちこちに焼けただれた茶色や黒くなった死体からの臭に混じりすごい臭いになっていました。

浦上駅付近に来ると、燃える物は燃え尽き、ただ燃え残った電柱の根っこから煙がふきだしていました。人や馬の真っ黒や赤茶けた死体がごろごろと転がっていて、その中を親兄弟、こどもを探してると思われる人達がうろうろとして男とも女とも判別出来ない死体をみてじいとしている人。それから先きは炭のような真っ黒く焼けた死体が灰に埋まったり、倒れたコンクリートの瓦礫の間から見えました。もうだれも何もいわずだまって見てる人。

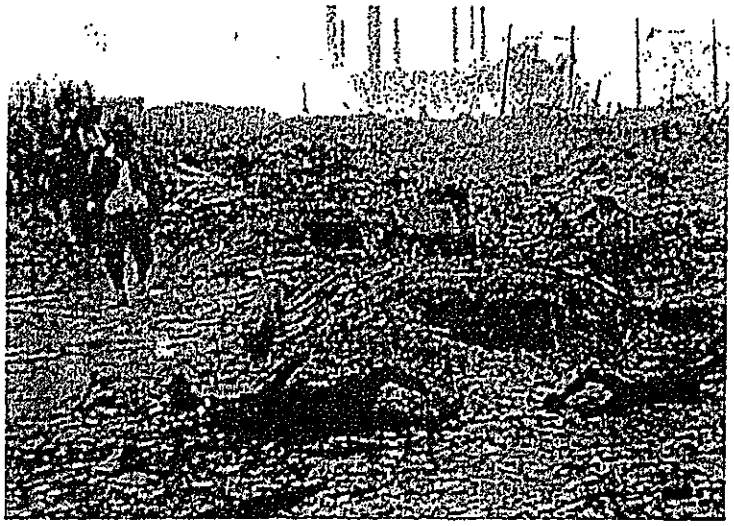
数日後の長崎駅付近

爆心地に近い小さな川の石垣の下は熱線で焼かれ木の根っこを焼いたみたいになって、



私が歩き、見た爆心地付近の状況た

爆風に飛ばされて死体の吹き溜まり見たいになってすごい光景、もう何にも考える事もできず、臭いも気にせず、ただもくもくと歩きました。



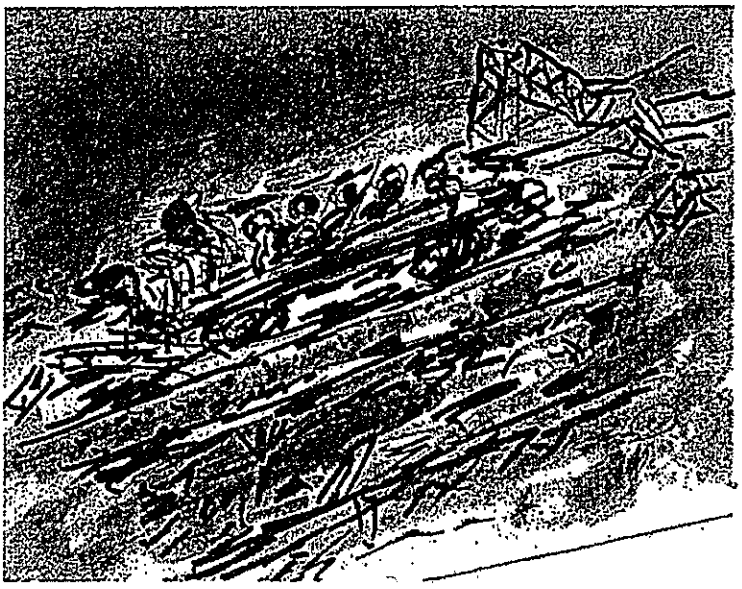
途中浦上駅近くの光景（原爆展写真より）

叔母の家は爆心地から２５０ｍ位の駒場町と言う所で爆発の火の玉の直下の様な所でした、家のあった場所を探し出した時はほんとにもう何にもいえない状態でした。叔母の家跡を路地や僅かにわかる家の基礎から家の跡がわかり、付近は木造住宅ばかりの住宅地でほとんど爆発の直下といえる所では瓦も砕けどこか飛んでしまったのか、小さな瓦礫と灰と砂の砂漠の様になっていました。その瓦礫と砂に埋まった中に潰れたミシンにからまつたボロボロになった叔母の骨とミシンの下側にわずかに黒くなった肉片と思われるものがついていました。「[redacted]チャン」はどこだと瓦礫をかき分け探し３０分くらいたった頃母が「ここにいたばい」と

ようやく探し出した[redacted]チャンの骨は白くボロボロ

言ったので見ると二つになったばかりの従妹の[redacted]ちゃんの骨は触ったら崩れんばかりでした。原爆が落ちる２～３日前に元気でかわいい格好でヨチヨチしながら私の家に来たのになあと思うと、どちらともなく灰で汚れた顔を見合わせ涙でボロボロになっていました。

母が骨を拾ってる間に近くを見て回ると、すぐ近くに大橋という電車の終点の近くに焼けた電車があり、それはお客が乗ったままの電車で外側は燃えてなく、客は座ったまま真っ黒くなっていました。それから叔母の近くの家の跡に縦穴の浅い防空壕があってその中に何かがいるような気がしたので覗いたら中かに蝉の抜け殻みたいになった死体がありました。前にここに来たとき会った近所の人じゃないかと思もいました。


大橋の終点近くにあった電車の客は炭になって座っていた

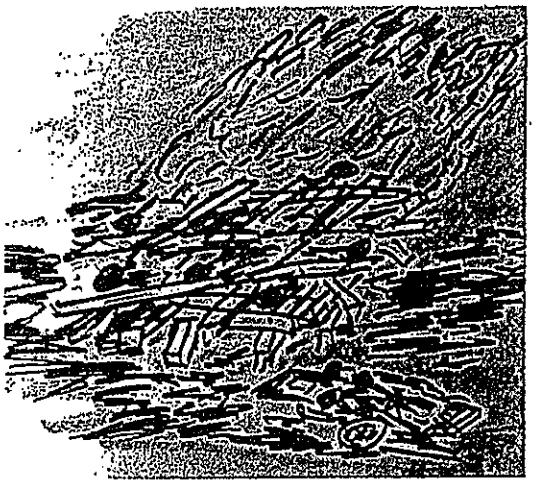
それから母と黙って、骨をだいて何も言わずただ黙々と歩いて家に向かいました。

もう廻りは全く気にならなかった。

原爆爆発の瞬間爆心地に近い所にいた人は建物の中にいても熱線、衝撃波で皮膚をはぎ取られ、何が起こったかも分からず、苦しんで亡くなったと思います。

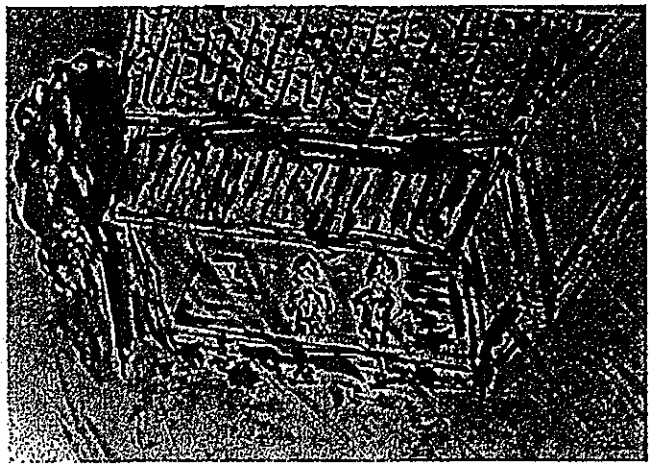
私は翌日山里上学校の少し上方爆心地から６００ｍ位の

所にあったあった学校に行いって見ようと思って一人で出かけ、燃えてない所の市役所の方から行ったら被爆まえ道路拡張で強制疎開の跡で残った材木を積み上げ市役所のゴミ取りの大八車で死体を運んできて材木の上に積み重ねて焼いていましたがその時はもう！別に臭いも光景も気にもなりませんでした。学校の下までいった時、坂道の土手下に爆風で飛ばされた砂溜まりの中に光るものが見えたので近寄って見たら、うっすらと灰をかぶった頭蓋骨でしたそこには何人かの人が埋まってるようでした。そこから見える高台の学校の方は見る限り何もなく、そこで引き返しました。



大八車で死体を運び焼ていた

姉が長崎駅から三つ目の長与駅の近くにあった鉄道管理部で救護班にいたのでそこ行ったらは、すごいものでしたテントの周りはすごいにおいで、姉からここに来たらだめだ、と言われましたが付近に行くと、うなり声とすごい臭いでした。この中は見ませんでしたが想像を絶するものがあってると思います。



それから何日か過ぎたころ原爆が落ちた時家の日が当1ってた縁側

で遊んでいた６歳の妹と４歳の弟の、妹は顔の左側に大きな水泡が出来き、弟は両眼のまわりが腫れめが見えなくなりましたが、母がどこからか黄色い薬を持ってきて手当をしてうちに、二人とも治りました。

私は１年位経った頃より風邪も引いてないのに、寒気と、４０度以上の熱が時々急にでるようになり、そんな時母にフトンを何枚もかけて貰っても震えが止まらず、フトンの中にお湯を入れたユタンポやヤカンを入れてもらってもガタガタ震え大変でした、

翌朝になると不思議に熱は下がりましたが骨がばらばらになった様でまた、２日ばかりは平行感覚がおかしくなって真っ直ぐ歩ことが出来ませんでした。こういうことがはじめは１年に何回か発生していましたがだんだん少なくなりましたが、このことは１０年以上続きました。今考えると被爆の何かが原因してるのではと思っていますが、そしてまた、つい最近まであの時の死臭に似た匂いを嗅ぐと一瞬あの日情景が頭の中一杯広がる時があります。今も多くの被爆者は後遺症で苦しい日を送ってる方がいます。

核兵器はまだまだ保有国、発展途上国の頭から離れないようです。しかしいまも核兵器を抑止力と言う言葉のもと核を保有し、世界に１９，０００発もあるといいます。

私達被爆者は平均年齢８０歳になろうとしています。核兵器廃絶の波は世界に大きく広がってきていますが、

今度の２０１５年の核拡散防止条約再検討会議では本当に実のあるものにするためには、世界のみんなが争いをなくし、２０１５年の核拡散防止条約（ＮＰ

Ｔ）再検討会議には、アメリカのオバマ大統領がチェコのプラハでの声明、「アメリカは世界で唯一原爆を使った国として道義上の責任がある」といったことを実務として、核保有国の核廃絶の実現に進んでいくことを願いたいです。

長崎被爆

千葉県松戸市[redacted]

「被爆体験談や平和への思い」応募用紙

記入日 平成26年（2014年）[redacted]月[redacted]日

ふりがな 氏　名　池田寛己 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	生年月日・年齢 [redacted]
現住所・連絡先 〒[redacted]	
電話 [redacted]	FAX [redacted]

（聞き取り代筆した方の連絡先）

ふりがな 氏　名 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	電話（　　）　－ FAX（　　）　－

※　上記に記載された個人情報の取り扱いについては、広島市個人情報保護条例に基づき、平和宣言の作成、被爆の実相を伝える資料としての活用及びこれに付随する事務連絡のみに使用し、御本人の同意なく第三者に提供しません。

（被爆当時の状況）

当時の年齢	14歳	性別	男 ・ 女
当時の職業・学年等（できれば具体的な勤務先・学校名等も御記入下さい。） 私は昼は川入町に所在した工業株式会社の事務所の用務員として夜は修道中学校在学中の二年生として通学。原爆投下の時間は事務所内その時間[redacted]長さんやられたと云う言葉に瞬間に私はピカッの光ではなくて一瞬炎がかげろうの間にもえて その後の爆風で後にたおされたと思ふんでは居なと全く気がつきませんでした。屋根はふっとび、壁は頭にガラスの破片で血が流れ江波に行く道路沿いの歩いて居られる方ひふがタレさがり多勢の病院の市内コクエンがモウモウと上り何事があったのかと思ひました事に火災は出なかった。防空ごうにひなんし、何故、戦争を終らせる為とはいえ原爆を広島長崎に使用したのかと思ふ			

※　被爆当時の状況については、平和宣言に盛り込む際や被爆の実相を伝える資料として活用する際等に、公開します。

※　この応募用紙に、被爆体験談（様式不問）を添付してください。

※　提出された書類は返却いたしません。